

イリノイ大学における教育活動と Zine

——主体的に学び社会と関わる——

西川 麦子

はじめに

甲南大学より在外研究の機会をえて筆者は、2018年9月より1年間、米国のイリノイ大学 Urbana-Champaign 校に客員研究員として在籍した。それまで、社会運動にルーツをもつ地域に根ざした小さなメディアをめぐる活動について、英国、London と、米国、イリノイ州、Urbana-Champaign (U-C)¹⁾において、住民組織に焦点をあてた調査研究を行ってきた。現地調査と並行して、U-Cのコミュニティラジオ局における日本語番組制作や、Zine（個人やグループによる自主制作冊子）発行などの活動に携わっている。また、甲南大学文学部社会学科において、「伝える」という行為をとおして「社会と関わる」意識を育てるメディア実践の授業作りに取り組んできた。

在外研究中、様々な分野、立場の人々と議論をする機会をえた。興味深いことに、イリノイ大学では、異なる専門分野の授業に、Zine-Making がアクティブ・ラーニングの方法として取り入れられ、図書館においても関連するイベントが開催され、Zine と教育に関する領域横断的な研究会が行われていた。Zine（ジン）とは、自主的に発行・頒布する印刷物である。紙の大きさも形も部数も、配布・販売の方法も、制作者に任されている。メインストリームと一線を画したオルタナティブ・メディアとして展開してきた Zine が、大学や高校、図書館などの、高等・公共教育機関において、なぜ、今、どのように注目されているのか。本論文では、イリノイ大学での在外研究と U-C での現地調査にもとづいて考察する。

1 においては、西川のメディア実践と、これを応用した教育実践の方法を説明する。2 では、2018年9月から1年間に筆者が関わった、イリノイ大学の図書館や複数の学部における Zine を取り入れた授業や関連する活動を紹介する。3 では、イリノイ大学図書館のアウトリーチ担当者へのインタビューを紹介して、図

書館が扱う情報として、また図書館と地域、住民との関係のなかで、Zine がどのように注目されているのかをとらえる。4 では、大学の異なる専門分野の研究者が、なぜ、どのように Zine に関心をもち、Zine-Making を授業に取り入れているのかを考察する。草の根メディアをめぐる活動は、誰もがパーソナルに表現し、発信し、マイノリティを含む多様な立場にある人が社会と関わる機会を生みだしてきた。その方法が、大学や高等教育機関において、他者／環境との関係のなかで自己を見つめ、主体的に社会に参与するアクティブ・ラーニングの方法として注目されているのではない。本論文が、草の根メディアの取り組みと現代の教育・研究の現場とをつなぐ試みとなればと考えている。

1 米英国での現地調査とメディア実践を応用した授業作り

筆者は、かつて、2010年9月から1年間、Urbana-Champaign に滞在し、住民によるメディア活動についての現地調査を始め、「多様な背景をもつ住民たちが、どのようにメディアを利用して表現・発信し、他者同士が集う『場』を作りだし、人と人との『関係』を生みだしているのか」という問題を現場での実践とあわせて探ってきた（西川 2012, 2013a, 2013b, 2013c, 2014a, 2014c, 2017）。

2011年4月より、UCIMC (Urbana-Champaign Independent Media Center, NPO) が運営するコミュニティラジオ局、WRFU で、日本語番組 Harukana Show (HS) を開始した²⁾。同月、UCIMC において、アメリカ中西部の Zine 関係者が集まる Midwest Zine Fest が開催された。UCIMC には、1階のホールに地域の Zine を集めたライブラリーがある。ラディカル・ライブラリアン・グループと称するボランティアのスタッフが、楽しそうに Zine を整理していた（写真1）。メンバーの一人、Chris Rizo にラジオ番組への出演を願ひし、



写真1 UCIMC Zine Library, 2011年4月9日, 西川撮影

第4回(2011年4月22日) Harukana Show の中で Midwest Zine Fest と UCIMC Zine Library について詳しく話を聞いた(西川 2017:52-53)。HS Old Podcast No.4-1 には, Riso のトークを次のようにまとめている。

「Chris さんは話のなかで, 何度か, “outside of mainstream” と表現されていました。アメリカの Zine には, マジョリティによる排他性への批判が根底にはありそうです。“長いものには巻かれない, そこには Zine がある”, これは, 私が Chris さんの話から受け取った印象です³⁾。

Harukana Show の日本在住のスタッフの一人, タテイシナオフミが, 以前から英米国の Zine に関心をもっていたことから, Zine を含む DIY Culture について, その後も番組でしばしば話題にとりあげた。HS をとおして Zine Culture にふれ, 形式に縛られない Zine に興味をもった。英語圏における日本語ラジオ番組をめぐる活動を, 英文冊子にして地域のイベントや出会う人々に配布できればと考え, 筆者は, HS のスタッフ, Thomas Garza とともに, 英語の *Grassroots Media Zine*, No.1 (2013) を発行した。続く *GMZ*, No.2 (2014) と No.3 (2016) では, 英国, London での草の根活動とメディアについて, 筆者が2000年代より行ってきた取材をまとめた。Zine 制作には, 内容や文体だけでなく, レイアウトも紙も自由に選んで表現できる面白さがあった。

筆者が英米国の現地調査へ出かける時には, *GMZ* シリーズを持参し, Zine を扱う書店, 公共, 大学, NPO の図書館, レコードショップ, 印刷スタジオ, 住民組織の集会場, イベント会場を訪ねた。Zine は, 作り手, 読み手, 活動やイベントの主催者たちのあいだの垣根が低く, 言葉や経験や物の交換が始まる。そこで出会った人が, 筆者にまた別の場所や人を紹介



写真2 「フィールドワーク研究」(2019年度)の受講生による Zine 作品, 2020年1月14日, 西川撮影

してくれた。英米国での Zine Culture をめぐる体験を Harukana Show で伝え, 番組ブログに詳細を記した(西川 2017)⁴⁾。ラジオ番組制作や Zine の制作・頒布といったメディア実践は, 現場からの発信であり, また, 筆者にとってはフィールドワークの記録でもあった。その社会の住民ではない「私」が, ラジオ番組と, 番組サイト, 紙媒体の Zine という, 異なるメディアを使いながら, いろいろな出合いを重ねていった。「伝えることは, 社会と関わることだ」ということを, 現場から学んだ。

英米国での現地調査とメディアワークの経験を, 甲南大学文学部社会学科の授業にも活かしている⁵⁾。筆者が担当している「フィールドワーク研究」は, 「質的な調査と分析方法に関する」講義科目であるが, 受講生たちは学外でフィールドワークを実施し, その調査記録にもとづいて Zine を制作している(写真2)。学生たちはフリースタイルの Zine 作りに最初は戸惑い, 読者に何をどのように伝えるのかを試行錯誤するなかで, フィールドで出会った人たちとの関係について改めて考えるようになる。授業では, 学外からジンスタ(Zinester: Zine 作家)を招いて, 自分のアイデアを形にして伝える面白さと, そのための「コツ」を学ぶ機会も作ってきた。学期の最後には, 「ZINE 大会」を開催し, 受講生が制作した「フィールドワーク Zine」を教室に展示し読み合う。参加者はそれぞれ, 推薦作品を2点選び, その理由を講評用紙に記し, これをもとにその年の受賞作品が選出される(写真3)。学生たちは, 「ZINE 大会」で多数の作品に触れ, 発想や表現の多様性に驚き, 自分の作品に対する感想を読み, 伝えることの難しさと手応えをえる(西川 2019)。

草の根メディアの現場でえた知見を, 大学教育にどのように活かすことができるか。さらには, こうした



写真3 第8回「ZINE 大会」(2019年度「フィールドワーク研究」)入賞作品一覧, 岩田萌花 (Student Assistant) 作

メディア実践の授業を, 海外の教育機関や組織, 団体と連携した多文化教育の方法として展開することはできないか。2018年9月からのイリノイ大学での研究期間中, 同大学の関係者と, このような問題について情報交換ができればと考えていた。

2 イリノイ大学の Zine に関連する取り組み

2-1 Zine-Making を取り入れた授業

イリノイ大学の2018年秋学期には, 筆者は2つの授業の Zine Workshop にゲストスピーカーとして参加した。情報科学部 (School of Information Sciences) の大学院生を対象とした図書館学の授業 (担当: Kathryn La Barre) と, 都市・地域計画学部 (Department of Urban and Regional Planning) の都市問題に関する学部生対象の授業 (担当: Efadul Huq) である。そこで, 甲南大学の「フィールドワーク研究」の取り組みを説明し, 2018年度前期の受講生たちの日本語の Zine 作品を展示した (西川 2019:65-66)。Zine は, 文章だけでなく, グラフィックを取り入れた作品が多い。紙の手触りや紙片の切り方, 綴じ方なども, 作者にとっての表現となる。Zine を手にとった人が, そこに記された言語を解さない場合にも, 作品として何か伝わる⁶⁾。

情報科学部教員の La Barre は, 2016年より UCIMC の Zine Library (写真4) の運営に携わっている。筆者がこのライブラリーに GMZ シリーズを寄贈したことがきっかけとなり, La Barre と知り合った⁷⁾。個人が自主的に制作し頒布する Zine は, 従来の図書館における出版物としての書籍の分類法をそのままあてはめることができない。だからこそ, 図書館学の授業に



写真4 UCIMC Zine Library, 2019年8月28日, 西川撮影

においては, Zine は, 情報リテラシーを再考するひとつの教材となる。2018年11月の図書館学の Zine Workshop では, 受講生は, 授業時間内に, 1枚の紙片を自由に使って, 「Literacy」というテーマで Zine を制作していた (西川 2019:65)。Zine 作りは, 一人ひとり異なる個人的な体験である。そう認識した時に, 内容も形も異なる不揃いな Zine の多様性と図書館において Zine を扱うことの意味に改めて向き合うことになる。

Zine は自己表現の手段であるだけでなく, 自分が媒体となって, ある事象や活動や人々の言葉を他者へ伝えることもできる。都市問題の授業を担当する Huq は, 地域・都市計画学部大学院博士課程に在籍している。移民問題, ジェンダー, 人種差別などに関心を持ち, マイノリティの声を伝える媒体として社会運動のなかで活用されてきた Zine に注目し, 2018年の授業に取り入れた。Huq 自身も, 人権問題などに関するコミュニティ活動に携わっている。Huq が担当する都市問題の授業では, 受講生がそれぞれの調査をもとに Zine を制作し, 教室に展示する Zine Fest を実施した。

甲南大学で筆者が担当する「フィールドワーク研究」の「ZINE 大会」にも, イリノイ大学で Huq が担当する「都市問題」の Zine Fest にも, 参加者が, 作り手であり評者となる緊張感と, 個性的な Zine に触れ, そこにいる人たちが一緒に楽しむ高揚感があった。しかし, それぞれの授業に提出された Zine の「作風」には, 異なる傾向があった⁸⁾。都市問題の授業で制作された Zine は, その後, UCIMC Zine Library に寄贈された (写真5)。

都市問題の調査レポートを Zine という形にすることによって, 学生たちの取り組みがどのように変わっ



写真5 イリノイ大学地域・都市計画学部「都市問題」の授業で制作された Zine (UCIMC Zine Library), 2019年7月6日, 西川撮影

たのか。筆者の質問に対して、Huq は、「学生がその問題に関与するようになった」(西川 2019:73)と述べた。Zine と教育について考えるうえで、「関与」がひとつのキーワードとなる。4で考察する。

2-2 Small Press Fest : 大学図書館の地域連携の活動

イリノイ大学の Zine に関連した取り組みは、授業だけではなくなかった。2019年4月13日には、イリノイ大学図書館が主催して、Urbana 市のダウントウンにある UCIMC に場所を借りて、第1回 Small Press Fest が開催された。これは、少部数出版、印刷に携わる団体や個人が集まるイベントである。大学図書館でアウトリーチを担当する Sarah Christensen が中心となって企画し、UCIMC Zine Library と協力して準備を進めた。また、Small Press Fest に先立ち、イリノイ大学内のアート Zine やコミックを所蔵する図書館などで関連イベントが開催された⁹⁾。

4月13日の Small Press Fest には、イリノイ大学の出版会、図書館、印刷工房、地域の出版社、Zine 制作グループなど、様々なレベルの組織、団体、個人が20あまりのブースを出した。筆者も、Grassroots Media Project¹⁰⁾として参加し、GMZ シリーズや、日本から届いたタテシナオフミの Zine や石黒結那¹¹⁾の絵葉書やさりを織りなどの作品を販売した。また、甲南大学の学生たちの Zine を展示した(写真6)。このブースを訪れた人たちは、甲南大学生たちの Zine を手に取り、学校給食についての Zine を楽しむ子供や、自分は日本に滞在していたことがあると話す人もいた。Zine を手にとると、ふっと言葉がこぼれ、そこにいる人たちと会話が始まる。8年前の Midwest Zine Fest や、英米国での Zine を扱う書店や Self-Publishers' Fair などの会場でも筆者が経験してきたことである¹²⁾。

La Barre が司会を務める Zine をめぐる活動に関す



写真6 Small Press Fest ブース, 左: Grassroots Media Zine Project, 右: イリノイ大学図書館 (ライブラリアンを紹介する Superhero Trading Cards に見入っている子供たち), UCIMC, 2019年4月13日, 西川撮影

るパネルディスカッションに参加した。私を含む3人のパネラーは、Zine を含む様々な媒体を利用して、それぞれの活動を展開している。Devin Morris¹³⁾は、New York の Brooklyn を拠点に活躍するアーティストであり *3 Dot Zine* を発行している。黒人アーティストたちが自由に表現できる環境作りに取り組んでいる。Mimi Thi Nguyen は、イリノイ大学のジェンダー & 女性学学部 (Department of Gender and Women's Studies) とアジア系アメリカ研究学部 (Department of Asian American Studies) の教員であり、また、1990年代から長年にわたり、いくつもの Punk Zine の制作、発行、コラム執筆などの活動に携わってきた¹⁴⁾。

Morris や Nguyen とは異なり、私は、アメリカ市民でもアーティストでもない。日本からやって来た一時滞在者として、8年前に、UCIMC で、コミュニティラジオや Zine Culture と出会った。ところが、同じ場所で2011年に開催された Midwest Zine Fest について Small Press Fest の関係者のあいだでは、ほとんど知られていなかった¹⁵⁾。当時、Chris Rizo が Harukana Show で語った「メインストリームに与しないオルタナティブ・メディア」としての Zine への思いを、Small Press Fest のパネラーとして私が、少しでも伝えることができればと考えた¹⁶⁾。

2-3 CEAPS での発表: 複数の草の根メディアの組み合わせ

Small Press Fest の翌々週、2019年4月25日には、イリノイ大学で筆者が在籍していた CEAPS (Center for East Asian & Pacific Studies) でも、メディア実践と教育について話す機会をえた。コミュニティラジオ局 WRFU の日本語番組制作と甲南大学の「メディア

文化論」におけるメディア実践の授業について報告した¹⁷⁾。

この日は、会場には、学生や教職員30人ほどが参加した。また、Small Press Fest での筆者の発表を聞いたという出席者から、こんな質問を受けた。「Harukana Show は、ラジオ放送とストリーム配信を行い、世界からのアクセスが可能なグローバルなメディアであり、一方、Small Press Fest で報告された *Grassroots Media Zine* は紙媒体で、時には1冊ずつを読者に手渡す。メディアはそれ自体がメッセージだとするならば、性格が異なる2つのメディアは、文化人類学のフィールドワークにおいては、どのように扱いうるのか」。

質疑応答の限られた時間内であったが、次のように説明した。「まず、現在の Zine の作り手たちは、複数のメディアを目的、状況に合わせて組み合わせている。紙媒体で Zine を作っても、その一方で、自分のウェブサイトを持ち、SNS で Zine を含めた様々な情報を発信している。私の場合も、放送、オンライン、紙媒体を状況に応じて使い分け組み合わせている。また、フィールドワークでは、現場から様々な情報をえるが、学術論文をとおしてだけでは、私が何を学んだのかをそこで出会った人々へ伝え直すことが難しい。だが、ラジオ番組や Zine では、より平易な言葉で、かつ創造的に伝えることができるように思う。*Grassroots Media Zine* シリーズを読み、共感して Harukana Show への出演を快諾してくれる人もいれば、GMZ とおした取材や出会いを、私がラジオ番組でレポートすることもある。ラジオ番組も Zine も、私にとっては、人と人をつなぐコミュニケーションツールだ」。

質問者は、イリノイ大学ランドスケープ・アーキテクチャー学部 (Department of Landscape Architecture) 教員の David L. Hays だった。CEAPS での研究会が終わった後、Hays に GMZ シリーズを手渡した。4ヶ月後、2019年秋学期に、「Negotiating Landscape through Zines」(LA587) という Hays が担当する新しいタイトルの授業が始まった。Zine を科目名に入れた授業は、当学部においては (おそらく、イリノイ大学の他学部においても)、初めてであった。Hays とは、私が帰国する直前に、もう一度話すことができた (4-3へ)。

2-4 Zine Cluster Meeting : Zine と教育の緩やかなネットワーク作り

2019年4月の Small Press Fest の開催は、Zine に関心をもつ様々な専門、立場のイリノイ大学教職員を

つなぐひとつのきっかけにもなった。大学図書館の Christensen と機械科学・工学部 (Department of Mechanical Science and Engineering) 教員の Leon Liebenberg が代表となり、イリノイ大学の IPRH (Illinois Program for Research in the Humanities) 2019-2020年度の Research Cluster 助成金をえて、「Transformative Learning Through Zine Making (Zine 作りをとおした変容的学習法)」という研究プロジェクトが始まった。専門分野を問わず、Zine に関心をもつ大学関係者が定期的に情報を交換し、各分野の教育活動に活かす取り組みである。2019年7月より、Zine Cluster Meeting と呼ばれる研究会が、定期的に開催されている。

領域横断的なつながりを作るという点で、図書館は興味深い組織である。イリノイ大学には、附属高校を含む、学問分野が異なる30あまりのライブラリーがあり、それぞれの専門のライブラリアンがおり、独自のコレクションもある。また、大学図書館も、U-Cの公共図書館 (Urbana Free Library, Champaign Public Library) と連携し、地域イベントなどにも積極的に参加している。Small Press Fest や Zine Cluster Meeting も、大学図書館がもつ学内外での広いネットワークを活かして、専門領域や立場を超えた人々をつないでいる。

2019年7月9日に、最初の Zine Cluster Meeting が、UCIMC Zine Library と Archive において、8月6日には、イリノイ大学附属高校 (University of Illinois Laboratory High School: Uni High) の図書室において開かれた (写真7)。Uni High では、ライブラリアンの DoMonique Arnold が、夏休み中で静かな校内を案内し、生徒たちが制作した Zine を図書室のテーブルに並べて見せてくれた。この高校では実験的に、英語



写真7 イリノイ大学附属高校図書室での Zine Cluster Meeting, 2019年8月6日, 西川撮影

の授業や、Arnold が担当するメディアリテラシーの授業でも、Zine 制作が取り入れられ、生徒たちの作品は、図書室の Zine Collection に収められている。「Zine は文章だけでなく、絵や写真を用いて、豊かな表現力を培います」と、Arnold は話していた¹⁸⁾。

Zine Cluster Meeting は、こうした会合がなければ接点がなかった人々をつなぐ機会となった¹⁹⁾。筆者が、機械科学・工学部教員の Leon Liebenberg と知り合ったのも、Zine Cluster Meeting であった。

2-5 機械科学・工学部の取り組み：学び合いのプロセスを協働でデザイン

機械科学・工学部では、学生の学習、研究、活動のプロセスや成果をオンライン上に記録、蓄積する創造的な ePortfolio を開発するプロジェクトを進めていた。そこで、学生一人ひとりが、自身について語る Digital Story Telling や、調査研究や活動の内容を対外的に伝える方法として、Graphic Novel や Zine 制作の可能性などを模索していた。2019年7月9日の Zine Cluster Meeting では、筆者の自己紹介として GMZ シリーズを Liebenberg に手渡し、後日、メールで、甲南大学での Zine を用いた授業の取り組みについてふれ、「あなたのチームの皆さんと情報を共有する機会があれば嬉しい」と伝えた。Liebenberg からは、GMZ シリーズを読んだ感想と、「ぜひ、我々の研究会で話してほしい」という日程を尋ねるメールが届いた。

7月18日、イリノイ大学の CITL (Center for Innovation in Teaching and Learning) のアクティブ・ラーニング用の教室 (iFLEX: Illinois Flexible Learning Experience) で、午前10時から3時間にわたる研究会が行われた。英語表現法、マルチメディア制作、デザイン&アート、教育心理学、学習・教授法、授業支援などに関わる8人の専門家が集まった(写真8)。この ePortfolio の共同研究会は、機械科学・工学部の複数の授業を対象としているが、従来の授業法を変革するために、こうした領域横断的なプロジェクトが組まれている²⁰⁾。

研究会の前半では、筆者が Grassroots Media Project とその活動の教育への応用について話し、後半では、機械科学・工学部の授業で行ってきた ePortfolio 制作の課題が議論された。イリノイ大学の機械科学・工学部の複数の授業での取り組みと、甲南大学の社会学科のメディア実践系科目の取り組み(西川 2018, 松川・辻野・西川 2018)は、専門分野は異なるが、メディアの使い方や学生が主体となるアクティブ・ラーニン



写真8 イリノイ大学機械科学・工学部の ePortfolio プロジェクトの研究会, 2019年7月18日, Liebenberg 撮影

グの方法が似ていた。このため筆者の発表に対しても、授業作りについてより具体的な質問がなされた。

例えば、「授業の課題として提出された Zine を、どのように評価するのか」という質問に対しては、次のように話した。「フィールドワーク研究においては、Zine 作品としての評価よりも、そこに至るまでのプロセスを重視している。毎回の授業の課題に対する小レポートだけでなく、調査の企画・実査・記録の各段階において複数回の課題を設定し、数多くの提出物があり、また授業内で調査の中間報告の発表を行い、調査記録を作成し、提出する。そのうえで、Zine 大会では、参加者が出品者であり同時に講評者となり、学生たちによる評価の結果を授業で公表している。こうした授業のプロセスを、共有し学び合う工夫をしている」²¹⁾。

研究会の参加者が、それぞれの専門の立場から多様な発想、意見を述べ合い、組織や専門の垣根を超えて学び合う経験をとおして、従来の授業とは異なる、ピア・ラーニング、アクティブ・ラーニングの実質的な方法を協働でデザインすることができる。Liebenberg たちの研究会の在り方自体が、私にとっては貴重な学びであった。

以上、筆者が2018年9月から1年間のイリノイ大学での在外研究期間に参加した、Zine-Making を取り入れた授業や Zine に関するイベントや研究プロジェクトを紹介した。その多くは、イリノイ大学においては、始まったばかりの取り組みや現在進行形の活動である。このように、Zine が今、なぜ、関心を持たれているのか。3では、アウトリーチの活動を展開する図書館と、4では、学生たちの主体性を引き出す参加型授業

という2つの側面から考えていく。

3 図書館とパブリック・エンゲージメント

3-1 図書館が注目する Zine

Zine を扱う図書館といっても、大学内には専門が異なる図書館があり、ミュージアム内のライブラリーと地域の公共図書館とは、目的や利用者も異なる。また、NPO の組織、団体が運営する図書館や、個人が収集した書籍等をコレクションとして公開している場合もある。筆者は、*Grassroots Media Zine* を発行するようになってからは、英米国の Zine Collection がある図書館を訪れ、そこで何人かのライブラリアンから話を聞いた²²⁾。2019年1月に渡英した際には、ロンドン大学の Senate House Library に勤務する Leila Kassir²³⁾ と会い、英国においても、図書館における Zine Collection の学術的な認識が高まっていることを知った²⁴⁾。また、イリノイ大学の情報科学部の La Barre からも、Zine を扱う米国の図書館やライブラリアンの活動について情報をえている²⁵⁾。こうした関係者の話をとりまとめてみると、一部の公共図書館や大学図書館が Zine に注目するのには、3つの理由があると考えられる。

第1に、その図書館独自の特別な Zine コレクションへの関心である。Zine は、自主制作であり一般の出版物とは流通経路が異なる。収集するのは容易ではない。だからこそ、Punk Fanzine, Grrrl Zine, Queer Zine, Football Fanzine²⁶⁾ など、特定のテーマについて、その図書館にしかないコレクションを作りうる。また、公共図書館や地域で開催されるイベントなどとおして、参加者が制作した Zine を収集して、公共図書館として地域コミュニティに関連する Zine コーナーを作ることも可能だ。

第2に、その時代、文化、社会の多様な声を反映する一次資料としての Zine への関心である²⁷⁾。オルタナティブ・メディアとして Zine には、マスメディアにおいて扱われにくい、社会的、文化的、政治的にマイノリティの立場にある人々の声を含み、その時代の Popular Culture を多様な角度から知る貴重な資料となりうる (Cox 2018: 77)。ただし、一般の出版物とは異なり、Zine によっては、出版年や著者までも不明な場合もあり、図書館の従来のカテゴリーでは分類することは容易ではない。

第3に、Zine Workshop など誰でも参加できるイベントとしても、注目されている。西川 (2019) でも言

及したように、現在の図書館は、「デジタル化の時代において『書籍』を扱うことの意味や、これからの図書館がどのような形で時代に合わせて生き残っていくのかを試行錯誤し、地域とのつながりを様々に工夫しており、Zine Workshop を開催し、Zine Fest や Little Press Fest に場所を提供しているのも、そのひとつの試みである」(西川 2019:64)。今日の図書館は、公共空間として様々な機能を持ち、人々が図書館にわざわざ足を運び、そこにあるものを利用し、イベントに参加することができる多彩な企画を用意している²⁸⁾。

Zine に関心をもつ理由や Zine を収集する際の重点の置き方は、それぞれの図書館によっても異なる。イリノイ大学図書館の場合は、資料として多様な Zine を収集しようとしているのではなく、アウトリーチの活動のひとつとして地域における Small Press Fest を開催し、図書館の教育支援として、Zine Cluster Meeting を開いている。

3-2 アウトリーチとパブリック・エンゲージメント

2019年8月23日に、イリノイ大学図書館のアウトリーチを担当する Sarah Christensen を Harukana Show のゲストスピーカーとして招き、ラジオ番組のなかで話を聞いた(写真9)。Christensen は、図書館情報学の映像資料を専門とし、イリノイ大学ではアウトリーチを担当している。Christensen は、2019年4月に第1回 Small Press Fest を企画・実施した。また、9月には、大学内のコンサート会場のロビーで、「人」を「本」に見立て貸し出す、「ヒューマンライブラリー (Human Library)」というイベントが予定されていた。

Harukana Show の筆者によるインタビューにおいて、Christensen は自身の活動について、次のように語っている。ここでは、日本語に抄訳する。



写真9 Sarah Christensen, WRFU Studio, 2019年8月23日, 西川撮影

……大学図書館のアウトリーチとは、どんな活動ですか。

「アウトリーチとパブリック・エンゲージメント (public engagement) について、まずは、図書館は、一般の人々に開かれた公共の組織です。社会にとってもとても大切な場所です。しかし、そこにどれほどのコレクションがあったとしても、図書館がどれほど多様なものを扱い、どんなサービスを提供しているかを知ってもらい、利用してもらわないと意味がありません。そこで、図書館の様々な側面を伝えるために、いろいろなイベントを企画しています。春に実施した Small Press Fest や、来月に開催するヒューマンライブラリーもそのひとつです。こうした催しは、他でも行われていますが、ローカルな文脈のなかで企画を練ります」。

……図書館といえば、そこで本を読む場所というイメージがありますが。

「そうですね、図書館とは、本質的には、『知 (knowledge)』へアクセスする場所です。『知』とは何か、それはどこから来るのか、と考えていくと、そのひとつの答となるのが、ヒューマンライブラリーです。つまり、印刷・出版以前は、情報は口承され、物語り (storytelling) が、知識を伝える方法でした。ヒューマンライブラリーでは、社会的にマイノリティの立場にあたり、障がいがあったり、退役軍人など、多様な経験をもつ人々が、ボランティアで『本』となり、『読者』の疑問に答えながら、話をします。参加者は、こうした対話から学んでいきます」。

……Small Press Fest を企画し、Zine Cluster Meeting も始められました。Small Press Fest は、第1回の開催ですね。

「Small Press Fest は第1回ですが、以前に UCIMC で Zine Fest が開催されたと聞きました。Zine には、政治的な側面もあります。大学図書館の企画としては、Zine に絞るのではなくて、少数出版物を扱うイベントにしました。そうすることで、Zine を含む自主制作の発行物から、イリノイ大学出版会のような発行部数が少ない学術書の出版社など、出版・印刷に関わる異なる組織、団体が参加することができました」。

……Zine は、図書館が扱う「正統な」書籍とは対照的な感じがしますが、ご自身は、どのように Zine に関心をもたれましたか。

「そうですね、最初の問題に戻りますが、誰が知を作り出し、何が権威づけるのか。私は、図書館が扱う知や情報とは、アカデミックな出版物だけでなく、より

広い内容を含み、また、多様な形があると考えています。様々なアイデアや経験を含むという意味で、Zine は豊かな情報源です。学生たちも授業の課題で Zine 作りに取り組んだりしています。インストラクターが作り方を教えるというよりは、参加者同士がやり取りしながら Zine ができあがっていきます」。

……Zine は、音楽やアートやより個人的な問題を扱い、どちらかという人文科学系というイメージがありますが、Zine Cluster は、機械科学の専門家との共同プロジェクトですね。

「そうです。Leon Liebenberg は機械科学・工学部の教員です。私は、図書館の仕事のなかで、自分の専門である視覚資料が大学においてどのようなニーズがあるのかを調査するために、学内のさまざまな専門家にインタビューをしました。そこで機械科学・工学部の Leon を紹介されました。彼の教え方は、とても創造的です。そこで協働したプロジェクトをやってみたいと思いました。Zine を授業にどのように取り入れることができるのかを、Zine をよく知る人に限定せずに、関心のある人たちと一緒に考え情報を共有できればと思います。このプロジェクトに関連する授業の受講生たちが作った Zine を、第2回の Small Press Fest で配布したいと考えています」。

インタビューの中で、筆者が図書館のアウトリーチの活動について尋ねた際に、Christensen は、パブリック・エンゲージメントという用語と合わせて話し始めたのが印象的であった。public engagement を日本語に直訳すると「公共的関与」、図書館の活動の場合は、「住民参画」という意味も含まれるであろう。図書館の活動を知ってもらうだけでなく、そこで利用者にも図書館の活動に関わってもらう。この言葉を、Small Press Fest やその1週間前に、Urbana のショッピングモールで開催された C-U Edible Book Festival, Human Library など、Christensen が携わってきた企画をとおして考えると、こう言い換えることができるかもしれない。「住民が図書館に関心をもつ仕掛けを作り、楽しく巻き込む」。

大学図書館をより多くの人々に親しみやすくするための取り組みは、イベント開催だけではない。例えば、イリノイ大学図書館のライブラリアンを紹介する「Superhero Trading Cards」(写真10)も、図書館を、世代を超えて広く地域の人々に開く試みである。南アジア地域を専門とし、コミックの特別コレクションを設置したライブラリアン Mara Thacker らが中心と



写真10 Super Hero Trading Cards (表面) 2019年4月、西川撮影

なり企画した。カードの表面には、大学のライブラリアン一人ひとりをアニメのキャラクターのように描き、裏面に氏名、所属、連絡先、そして専門分野をスーパーパワーとして紹介している。これを、ライブラリアン各自が、ある種のビジネスカードとして使うだけでなく、学内外のイベントでも利用している。Small Press Fest では、大学図書館のブースには、テーブルに25種類の Superhero Trading Cards が積み上げられ、子供たちがやってきて楽しそうに1枚ずつ手にとって見ていた(写真6)²⁹⁾。

Christensen や一部のライブラリアンは、多様性に開かれたこれからの図書館のあり方を探る動きのなかで、一般の出版物とは異なる「Zine というスタイル」に、改めて注目するようになった。また、同時期に、大学の異なる分野において、学習・研究の内容を創造的に表現・発信し社会と共有する授業方法を模索する動きがあり、こうした流れを、大学図書館が広いネットワークをとおして察知することができた。そして教育支援の一環として、Christensen が中心となって、Zine-Making を授業に取り入れる試みに関心をもつ異なる分野、立場の人々を、緩やかにつなぐ、「Transformative Learning Through Zine Making」という新しいプロジェクトが開始された。そこでは、Zine をひとつの手がかりとして、大学という場所の開き方や知の共有の方法を模索しようとしている。

それでは、大学の異なる専門分野の授業においては、Zine のどのような側面が注目されているのか。

4 教育と Zine: 主体的に学び、社会とつながる

4-1 大学教育と Zine Culture との関わり方

2で紹介したイリノイ大学における Zine に関する授業、研究会、イベントをとおして、図書館関係者以外にも、様々な専門の教職員と出会ったが、Zine Culture との関わり方には、3つのタイプがあった。

第1のタイプは、Zine をめぐる活動に Zinster として深く関わっている。例えば、イリノイ大学の教員の Mimi Thi Nguyen は、2-2で述べたように、イリノイ大学のジェンダー&女性学学部とアジア系アメリカ研究学部の教員であり、また1990年代からアメリカの Punk Zine をめぐる活動に深く関わってきた。Zine Culture は、Nguyen の思想と活動に欠かすことができない研究のツールであり、ルーツでもある。また、イリノイ大学のアート・デザイン学部の Art & Design Laboratories の技術スタッフの William Arnold は、授業のなかで、リソグラフ印刷を使った Zine 制作を教えている。W. Arnold は、自身の工房で WORK Press & Publication という印刷、出版活動もしており、リソグラフプリントを使った Art Zine を発行している。

第2のタイプは、専門分野の研究対象として Zine に関心をもち、地域における活動を支援する。例えば、情報科学部教員の Kathryn La Barre にとっては、UCIMC の Zine Collection は、図書館学において分類法を再考する研究調査対象であり、かつ社会的実践としてコミュニティ・ライブラリーの運営を担い、大学教育にも活かしている。次節で詳しく述べるように、La Barre の研究者、実践者、教育者としての活動が、図書館の地域連携の活動ともつながり、また、近年 Zine に関心をもつようになった次の3つめのタイプの研究者の動きも支えている。

第3のタイプは、Zine 作りや Zine Culture に関わった経験は浅いが、教育実践のツールとして Zine に関心をもち、授業に取り入れている。2で言及した都市・地域計画学部、機械科学・工学部の授業やプロジェクトにおいては、学生の主体性を引き出し、調査研究対象との関係性を考えるひとつの方法として、Zine に注目している。イリノイ大学の場合は、こうしたタイプの研究者の出現が、教育における Zine 利用の裾野を広げている。

イリノイ大学では、第1のタイプのように、自身の活動のなかで Zine Culture に関わってきた教職員は

これまでも存在していた。しかし、近年、それぞれの動機から、Zine の教育への利用に関心をもつ研究者が出現してきた。また、大学教員の La Barre が UCIMC Zine Library の活動に携わっていることによって、地域における Zine Culture の活動と大学教育とが接続しやすくなった。では、La Barre にとっては、専門の調査研究とコミュニティ活動と教育実践とは、どのように関連しているのか。

4-2 図書館情報学と Grassroots Library：地域に軸足を置いた活動

Kathryn La Barre の自身のサイトには、履歴や業績の他に、「Engagement」と題したページがある。そこには、2つの活動が紹介されている。1つは、UCIMC Zine Library であり、もう1つは、Multicultural Community Center の The Bilingual Community Library の支援活動である。4月に UCIMC で開催された Small Press Fest では、La Barre は、情報科学部の大学院生たちとともに、イベントの実施に多岐にわたって協力している。また、5月には、Urbana 市の Urbana Free Library で、一般住民にむけてオーラルヒストリーのワークショップを開いた(写真11)。

2019年7月12日の Harukana Show では、La Barre をゲストに迎えた。7月は「国際 Zine 月間」であり、UCIMC の Zine Library の関連イベント³⁰⁾を番組で紹介し、La Barre が携わる地域の活動についても詳しく語ってもらった。以下では、La Barre の話の一部を日本語に要約する。

「私の専門は、図書館情報学のなかでも、特殊コレクションの分類や名前のつけ方についてです。図書館での分類、コレクションの名称に、ジェンダー観や文



写真11 Oral History Workshop, Urbana Free Library, 2019年5月25日, 西川撮影

化や政治などがどのように影響しているのかを検証していきます。IMC の Zine Library やアーカイブでも、一般の図書の分類にはあてはまらない様々な Zine や資料をどう整理していくのか、専門の知識と経験が活かされています。また、図書館情報学の学生たちにとっても、Zine Library に関わる活動は、現場から学ぶ貴重な経験となります。

私自身は、特に、コミュニティに拠点をおいて様々な人々が参加して作り上げていく文化活動に関心があります。UCIMC Zine Library の運営に4年ほど前から携わるようになったことがきっかけです。また、Urbana の北部、Rantoul にある Multicultural Community Center (MCC) の Bilingual Community Library 作りにも携わってきました。Rantoul にはかつては空軍の基地がありましたが、現在は、農業コミュニティです。毎年、6月から10月にかけて季節労働の移民が多数やってきます。家族で滞在している場合も多く、たくさんの子供たちがいます。そこで、子供向けの英語とスペイン語の本の寄付を募り、ライブラリーを作りました。

Oral History Project では、公共図書館で、家族や地域のオーラルヒストリーや従軍経験者への聞き取りと記録作りのワークショップを開きました。また、UCIMC は2020年に20周年を迎えます。2000年に UCIMC の設立に関わった人々から話を聞き、オーラルヒストリーの記録を作っています。

イリノイ大学は州立大学で、また Urbana-Champaign は大学を中心とした地方都市でもあり、コミュニティとの関わり、アウトリーチの活動を重視しています。州の予算によって大学が運営されており、地域とのつながりや貢献が求められています。また、図書館学の教育においても、公共図書館やNPOの地域組織と連携した活動は大切になります。図書館情報学の学生たちは、ライブラリーやミュージアムに就職する場合も多く、そこでは利用者サービスは重要な仕事です」。

La Barre が、地域との関わり方として強調したのは、「community based participatory culture」への関心である。Zine はまさに、「地域に基盤をおく参加型文化」である。誰でもが表現・発信していくことができる。一般の出版物とは異なり流通経路は限られるが、イベント会場などで出会った人に手渡すなど、顔が見える他者との交換を含む(西川 2017)。そうした参加型メディアの活動に、La Barre は、community based と言葉を添えた。UCIMC Zine Library も、季節移民



写真12 (左) UCIMCにて Zine Workshop 用トランク中身, 2019年7月1日, (右) イリノイ大学にて Zine Workshop の荷物, 2018年10月16日, 西川撮影

労働者の子供たちのためのバイリンガル・ライブラリーの活動も、Zine や本をとおして多様な人々が交流する「場」作りである。

La Barre はまた、オーラルヒストリー・プロジェクトや UCIMC のアーカイブ室の設置も手がけ、記憶と記録を形にして整理する活動を進めている。参加型文化や草の根活動は、その趣旨に賛同する人々が集まり、一時的な盛り上がりを見せても、その経緯を随時に記録し共有できる形にすることは、容易ではない。La Barre は、人々の声に耳を傾けながら、多様性に開かれたコミュニティ・ライブラリーという場所を作り、並行してそこに過去と現在と未来をつなぐ仕組みを作ろうとしている。Harukana Show のホスト役として日本からオンラインで出演している小牧龍太が、La Barre が強調した community based を日本語で「地域に軸足を置いた」と表現した。地域に拠点をもつからこそ、そこに時間という軸もおくことができる。

UCIMC Zine Library には、Zine Workshop をどこでも開催できるように、様々な文房具を入れたトランクが用意されている。Zine Library と記されたこのトランクを、イリノイ大学や地域のイベントで何度も見かけた (写真12)。UCIMC Zine Library の関係者自らが、地域のイベントや教育現場へ積極的に赴くという姿勢が、Zine-Making を取り入れた教育活動の広がりを支えている。

4-3 表現と関与：主体性、身体性、関係性 問題への関与、内面化

都市・地域計画学部の2018年「都市問題」の授業を担当した Efadul Huq は後に、筆者とのメールのやり

とりのなかで、こう述べている。「あなたから以前、『授業において受講生たちが、一般の調査レポートではなく Zine を制作することによって、何が変わったのか』と尋ねられた。同じ質問を今受けたら、こう答えるだろう。学生たちは、Zine 作りをとおして、授業で学んだ問題に、自分たちなりに取り組み内面化 (internalized) していった」。

では、Zine の何が、問題への関与を促すのか。筆者が担当してきた甲南大学の「フィールドワーク研究」の授業では、Huq の「都市問題」の授業と同じように、受講生各自がテーマを決めて調査を行い、その内容を Zine 作品にして、「ZINE 大会」で展示し、互いに講評する。学生たちは、「ジン」という初めて聞く言葉と、他の授業の課題レポートとは異なり決まったフォーマットがないことに戸惑う。フリースタイルであるがゆえに、調査をとおして得た情報のなかから何を伝えるのか、問題の焦点を見極め、その伝え方までを自分で決めなければならない。問題と向き合い、作品として「手におえる範囲」の枠を設定せざるを得ない (西川 2019:71)。

また、Huq の授業も、「フィールドワーク研究」も、受講生が互いの Zine を展示、講評する時間を設けている。調査の内容を、作者として第三者に伝えようとする時、取材対象(者)との関係を振り返りようになる。Zine とは、パーソナルな自己表現の手段であるが、他者に伝えるための媒体でもある。自分と向き合う時の様々な感情と、他者に伝えるという行為とに折り合いをつけながら、モノとしての Zine ができあがっていく (西川 2019:71-72)³¹⁾。

「遊び」をとおして主体的に学び合う

機械科学・工学部の Liebenberg を代表とするチームは、2019-2020年度のイリノイ大学からの研究助成を獲得し、ENgagement In eNginering Education (ENGINE) というプロジェクトを開始した³²⁾。遊びながら学ぶ主体的な姿勢と、専門家としての意識を培う、新しい教育・学習法の開発を目指している。学習の結果だけを評価するのではなく、そこに至る工程を可視化し、学習意欲を引き出す「仕掛け」作りに取り組む (Pegano, Liebenberg, Goldstein 2019)。

このプロジェクトが強調する学習における「遊び」の要素の重要性は、甲南大学の「フィールドワーク研究」とも共通する。受講生が、調査をもとにした Zine 作品を制作し、最後に行う展示・講評会も、ZINE 「大会」と呼び、参加者どうしがイベントとして楽し

みながら学ぶ(西川 2019:74, 注20)。Liebenberg たちが教育プログラムに「遊び」を取り入れるのには、「フィールドワーク研究」の場合と同様に、2つの意図があるのではないかと推察する。第1に、参加者の主体性を引き出す。楽しみながら学び、参加者が次の展開を自分で考え創造的に工夫する。第2に、力関係を変化させる。授業における指導者と学生との関係を変化させ、教員はイベントの企画者として存在するが、「遊び」のなかでは参加者同士が学び合う。

Liebenberg は、筆者に自分たちのプロジェクトを説明するために、学生たちが制作したデジタル作品を見せてくれた。1つは、「Thermodynamics (熱力学)」の授業 (ME300) のチームプロジェクトによる「エネルギー危機が来る前に (Before the Energy Crisis)」, もう1つは、「Design for Manufacturability (DFM: 製造性を考慮した設計)」の授業 (ME270) の受講生による「リサイクルのデザイン (Design for Recycling)」と題した Graphic Novel である。ある種の学習漫画、絵本であるが、学生が個人やチームを組んで工夫をこらし、研究者に限らず、一般の人にも手にとってもらい、読ませる、考えさせる作品となっている。受講生のなかには、授業期間が終わっても、自分で作品制作を続ける学生もいるという。

身体性と関係性を再考する

2019年9月、筆者がイリノイ大学での1年間の在外研究期間を終えて帰国する直前に、ランドスケープ・アーキテクチャー学部教員、David L. Hays とようやく会うことができた。Hays が担当する2019年秋学期の「Negotiating Landscape through Zine」(LA587) の授業が既に始まっていた。科目のタイトルとなっている、Zine をとおしてランドスケープを「調停する (Negotiating)」とはどのような意味なのか。シラバスの冒頭には、こう記されている。

「ランドスケープとは、人間と自然との関係である。その関係は、広い範囲のメディアをおして調停される。このセミナーでは、現代のランドスケープが、Zine という媒体をおして、どのように交渉され表象されてきたのかを掘り下げて考えていく。Zine とは、自主制作、低予算の印刷物である。自己表現の手段として、またメインスリームとは一線を画し、この数10年の間に普及した。最近の Zine 作品には、人間と自然との関係も重要なテーマのひとつとなっている」。

Champaign のカフェで、Hays と2時間あまり、お互いの Zine への関心と授業での取り組みについて話

した。Hays の関心は、人と自然、環境との関わり方をデザインし、またその関係の変化の歴史と現代性を読み解くことにある³³⁾。ところが、Hays の話では、学生たちは、ランドスケープをパソコンの画面のなかでとらえ、設計することはできるが、その場所にあるはずの音や匂いや温度を想像することができない。身体をとおして「風景」をとらえる、自然と関わる感覚が希薄になっているのではないかと Hays は危惧している。

一方、Landscape Zine には、自然や環境との関わり方をパーソナルな感情をも含め、様々な角度から表現しているものがある。Hays の授業では、Zine というメディアの歴史を知り、Landscape Zine を読み解きながら、受講生自身が Zine を作る。授業の最終回には、学生たちは各自が制作した Landscape Zine を互いに交換する。パソコンの画面のなかで完結するデザインではなく、印刷して人に手渡す Zine を作るプロセスのなかで学生それぞれが、「人と自然との間」に身をおく意識をもつようになり、ランドスケープを再考するきっかけになるのではないかと Hays は話していた。

都市・地域計画学部の「都市問題」の授業、機械科学・工学部の「ePortfolio」や新しい授業作りの取り組み、ランドスケープ・アーキテクチャー学部の「ランドスケープ」の授業は、それぞれ学部も専門性も授業の目的も異なる。しかし、そこでの Zine は、授業の参加者が、調査研究の対象やテーマに対する関与を深める装置であり、Zine-Making は、心身をとおして感じ、主体的に考え表現し、対象との関係をとらえ直すというプロセスを経験するツールとして使われている。

4-4 学内外での有機的連携

イリノイ大学において、Zine という小さなメディアをめぐる授業や研究会やイベントを追いながら、筆者にとって興味深かったのは、異なる学部において、バラバラに起きているかのように見える動きが、実は、連携していることである。例えば、David L. Hays の授業では、受講生たちが UCIMC Zine Library を訪問し、Kathryn La Barre が講師となり、Zine Workshop を実施した。別の日の授業では、Art & Design Labs での、William Arnold によるリソプリンターを使った実習が行われた。また、2020年3月から4月にかけて、Hays が共同運営している Chicago にあるアートギャ

ラリー、「Space p11」(NPO)において、Landscape Zine の展示が予定されている。これには、イリノイ大学の「Transformative Learning Through Zine Making」プロジェクトも共催に含まれている。第2回 Small Press Fest は、2020年10月に開催される予定だ。2019年秋学期の Hays のクラスで制作された Landscape Zine も出展されるだろう。

大学図書館のアウトリーチの活動と、ボランティアによって運営されるコミュニティ・ライブラリーと、各学部の専門の授業の取り組みと、それを担当する教員の学内外での活動は、目的も関係者も異なる。それでも、様々なネットワークが状況に応じて機能する。それは、この論文で名前をあげた一人ひとりが、大学の職務とは別に、異なる場所を拠点にそれぞれのコミュニティ活動を実践しており、関係をつなぐことによって、何かが展開する可能性があることを認識しているからだろう³⁴⁾。だからこそ、それぞれの活動のなかで、何らかのきっかけで Zine Culture に出会い、Zine への関心をたどり、大学教育においても、そのつながりを互いに引き寄せてきた。

何かに関わるツールとなるメディアは、必ずしも Zine である必要はない。人によっては、コミュニティ・ライブラリーや、NPO のギャラリーであり、コミュニティラジオ局であり、図書館に場所を借りて行われる様々なイベントでもある。筆者が在外研究に行われていた Zine-Making を取り入れた授業作りも、今後は、多様な媒体を用いてそれぞれに展開するだろう。

おわりに

イリノイ大学における2018-2019年度の1年間の在外研究において、Zine という小さなメディアをとおして垣間見ることができたのは、大学とそこでの教育や研究が、地域や社会に開かれ、その関係のなかでこそ存続しうるというある種の危機意識と、この問題に対して前向きに取り組む意志のようなものだ。イリノイ大学は州立大学であり、財政危機にも直面してきた。いろいろな専門の研究や教育が、暮らしや社会とどう関わり、それを学び、研究することがどのような意義があるのかを社会に説明することができなければ、予算も人材も確保できない。教育のあり方も、変革が求められる。そのような状況だからこそ、一方で、Zine のように表現すること、伝えること、つながることの原点のようなメディアが、見直されているのかもしれない。

草の根メディアをとおした人を介した顔が見えるつながりは、地域や国内に限らず、海を越えることもできる。甲南大学の2019年度後期の「フィールドワーク研究」において、学生たちが制作したフィールドワーク Zine は、2020年1月14日の「ZINE 大会」と参加者の審査を経て、一部の作品をイリノイ大学附属高校(Uni High)の図書室と UCIMC Zine Library に届けたいと考えている。授業で学生たちにそう伝えと、提出された複数の Zine に、英語のタイトルがつけられていた。自分の Zine を英訳して、改めてもう一冊コピーを提出する学生もいた。海外に読み手がいることを想像すると、調査テーマや情報の集め方、伝え方の意識も変化する。Uni High では、第2言語として、日本語クラスを選択することができる。日本文化に関心をもつ高校生が、日本の大学生によるフィールドワーク Zine を、授業や図書室で手にとることがあれば、どのような感想をもつだろうか³⁵⁾。小さなメディアをグローバルに活用した教育実践を、試行錯誤しながら展開していきたい。

謝辞

甲南大学より在外研究の機会を得て2018年9月から1年間、米国、イリノイ大学に在籍する貴重な機会をえました。また、科学研究費補助金・基盤研究(B)(海外学術調査)「多文化社会における“コミュニティ”活動とメディア戦略に関する実践的研究」(研究代表者西川麦子、2015年度~2018年度、課題番号15H05173)の最終年度にもあたり、4年間の調査研究の成果とネットワークを活かして、英国、London でのフィールドワークと、米国、Urbana-Champaign における充実したメディア実践を継続することができました。イリノイ大学では、異なる専門分野の教職員が協働して教育活動に取り組んでいることを知り、刺激を受けました。心より感謝を申し上げます。

この論文の内容に関わる一部の方々と団体のお名前を記させていただきます。DoMonique Arnold, William T. Arnold, Kathryn La Barre, Sandra S. Burklund, Yuchia Chang, Sarah Christensen, Jason Finkelman, Thomas Garza, David L. Hays, Efadul Huq, 石黒加那, 石黒結那, Leila Kassir, Tim Liao, Leon Liebenberg, 院南マリ, Mimi Thi Nguyen, 小牧龍太, 松下弘海, 松川恭子, Tanya Peixoto, David Plath, Chris Rizo, Misumi Sadler, Mike Yu-Chuan Shen, Robert Tierney, タテイシナオフミ, 辻野理花, Jim Wentworth, Ava Wolf, Bookartbookshop, 甲南大学(社会学科, 文学部, フロンティア研

究推進機構, 国際交流センター, 教務部), 甲南学園情報システム室, St. Louis Public Library, University of Illinois at Urbana-Champaign (Center for East Asian & Pacific Studies, Center for Innovation in Teaching and Learning, Department of East Asian Languages and Cultures, Laboratory High School), Urbana-Champaign Independent Media Center (Zine Library, WRFU), Urbana Free Library.

注

- 1) アメリカ, イリノイ州, Urbana 市と Champaign 市には, 両市にまたがって University of Illinois at Urbana-Champaign (UIUC) がある。United States Census の2018年7月1日現在の推計によると, Urbana の人口は42,046人, Champaign は88,029人である。また, UIUC website の“Campus Facts”によると, 当大学は15の Colleges and Instructional Units からなり, 学部生は米国50州から33,673人, 世界78カ国からの留学生が5,270人 (Fall 2018), 大学院生 (Graduate and Professional Education) は15,666人 (Fall 2018) である。
- 2) Harukana Show は, 日米在住の番組スタッフと WRFU のスタジオとをオンラインでつないだ生放送のトーク番組である。日本語, あるいはゲストによっては英語で話す。毎週, 金曜日午後6時から7時にラジオ放送とストリーム配信される。2020年1月17日現在, 460回の放送を重ねた。各回, トークの収録・編集音源に文章と写真を添えた Podcast のページを制作し, 番組サイトに掲載している。
- 3) HS Old Site, 「No.4-1, April22, 2011 アメリカの Zines とは?」。Midwest Zine Fest 2011 については, HS Old Site Blog, 「ゆったり Zine な土曜日~Midwest Zine Fest @ IMC, May1, 2011」にレポートし, HS Old Site Albums, 「Midwest Zine Fest, April 30, 2011」に写真を掲載している。また, 第4回 Harukana Show の Chris Rizo へのインタビューは, 番組収録音源とともに, HS Blog, 「Chris さんのインタビュー (April22, 2011) Zine: メインストリームに抗するメディア, Nov. 20, 2016」にも掲載している。
- 4) 西川 (2017) では, 「SNS 隆盛の時代に, なぜ, 今, 紙媒体の Zine 作りに多くの人が関心をもつのか」という問題を, イギリスの London やアメリカのイリノイ州でのコミュニティ活動とメディアに関する調査にもとづき論じた。そこでは, 現代の DIY Culture への志向, 作り手の「身体性」を残すモノとしての Zine の魅力, 「顔が見える他者をつなぐ」Zine の機能について論じている。
- 5) 甲南大学文学部社会学科では, 「『他者とコミュニケーションをとる手段』として多様な情報媒体の重要性を認識し, また, 国内外での社会的実践の方法を教育にも取り入れ, 『伝えて学ぶ』メディア実践を授業のなかで行ってきた」(西川 2018:95)。「デジタル・ストー

リーティングの手法を用いた映像制作と発表会」「国内外の地域メディアにおけるラジオ・動画番組制作と放送・配信」「地域を素材とした映像制作と上映会」などである (松川・辻野・西川 2018)。

- 6) 筆者は, 2019年1月に渡英し, London のアート系書店, Bookartbookshop において甲南大学の学生たちの Zine 作品を展示した。この時にも, 文字だけでなく, グラフィックも用いて総合的に表現する Zine のメディアとしての可能性を実感した。西川 (2019:73), HS Blog, 「London から Zine レポート(11), Bookartbookshop で SKU Fieldwork Project の Zine 作品展示! Jan. 17&24, 2019」参照。
- 7) 2011年4月に Harukana Show に出演し, Midwest Zine Fest について話した Chris Rizo は当時, Kathryn La Barre のもとで図書館学を学ぶ大学院生だった。La Barre は, Rizo をとおして UCIMC の活動に関心を持ち, Zine Library の運営を引き継ぐことになった。2016年には, La Barre が, HS に出演し, UCIMC の Zine Library の活動に携わった経緯や活動の内容について紹介している (HS Podcast, 「No.287, Sept.16, 2016, Zine Collection をライブラリーする with Kathryn」)。
- 8) イリノイ大学の都市問題の授業に提出された Zine は, 「紙の裁断が不揃いであっても, ホッチキスの綴じ方が少々いびつであってもそのまま, 表現したいイメージを自分で作り上げてゆく工程を残したままの『はみ出る』作品が多く, 甲南大学の学生の作品が市販のノートを使うなどして一定の形に『納める』作品が多いのとは対照的であった」(西川 2019:72-73)。
- 9) 2019年4月6日(土)には, 大学図書館が主催する “The 14th C-U Edible Book Festival” が, Urbana のダウンタウンにあるショッピングモールで開催された。地域の人々も参加し, 小説などをモチーフにしたケーキが出品された。「食べられる本フェス」は, これまでイリノイ大学図書館内で開催されることが多かったが, 今回は, Small Press Fest と同様, 大学のアウトリーチの活動として地域で行われた。いずれも, Christensen が担当している。4月8日(月)には, イリノイ大学の Ricker Library of Architecture and Art が所蔵する Art Zine が当館内で展示された。4月9日(火)の “Risograph Printing for Zines and Comics” においては, School of Art + Design の工房で, リソグラフの印刷機を使った Zine 制作のワークショップが行われた。リソグラフは, 日本の理想科学工業が1970年代から販売している高速デジタル印刷機であるが, 海外ではアーティストの作品や Zine 作りにもよく使われている。4月10日(水)の “Comix and Graphic Novel Collection Showcase” では, Undergraduate Library において International and Area Studies Library の特別コレクションである南アジアのコミックなどが展示された。
- 10) Harukana Show と Grassroots Media Zine の活動を合わせて Grassroots Media Project と呼んでいる。“Grassroots Media Project” website 参照。

- 11) 「石黒結那プロフィール, アーティスト紹介」, 「Paralym Art」 website 参照。
- 12) HS Podcast, 「No.288, Sept. 23, Print, Publication Studio @ London」 参照。
- 13) Devin Morris は, 他のアーティストとともに, Brown Paper Zine & Small Press Fair を主催し, 紙媒体の Zine だけでなく, 写真や動画など異なるメディアを用いた表現活動を展開している。「3 Dot Zine」 website を参照。
- 14) Nguyen は, 1991年より, *Slander* などの Zine を制作・発行し, *Punk Planet* のコラムも執筆していた。また, *Maximumrocknroll (MRR)* の活動にも携わってきた(“Mimi Thi Nguyen”, Department of Gender and Women’s Studies website)。MRR は, 1977年に punk rock radio show として始まり, 1982年からは並行して月刊の Zine が発行されるようになった(“HISTORY”, MRR website)。この紙媒体の月刊誌が, *MRR#432* (May 2019) をもって終了することになった。2019年4月の Small Press Fest のパネルディスカッションでは, Nguyen は, 今後オンラインのみに移行する MRR への思いを語った。
- 15) イリノイ大学を中心として発展した大学街である Urbana-Champaign においては, 毎年, 一定の割合の学生, 教職員が転出入する。UCIMC の活動や地域の住民組織も, 関係者が移動しやすい。地域の草の根活動は盛んであり, いろいろな活動が相互に連携しやすいが, 関係者が転出すると, 後の活動へと継承されにくい側面もある。
- 16) Small Press Fest は, イリノイ大学の地域連携を目的とした活動だからこそ, イリノイ大学の図書館をはじめとした出版, 印刷に携わる学内外の団体, UCIMC の Zine Library や刑務所に本を送る運動など, 異なる立場の組織, 個人を1つのイベントに集めることができた。
- 17) Mugiko Nishikawa, “Grassroots activities and media strategy: How to teach alternative media in the classroom”, VASP Brown Bag, April 25, 2019.
- 18) DoMonique Arnold は, イリノイ大学附属高校 (Uni High) のアウトリーチの活動の他に, 様々なコミュニティ活動に積極的に関わっている。WRFU の子供ラジオ番組の制作にも携わっていたことがあり, また現在もベリーダンスのインストラクターをしている。こうした地域での活動は, Uni High の図書室の活動にも活かされている。Arnold は, 2019年8月16日の Harukana Show に出演し, 次のように話をしている。「Uni High の図書室では, 生徒たちの要望を聞きながら, 地域コミュニティともつながり, 独自の取り組みをしています。例えば, “Me to Movement” について, WCA の関係者を高校に招き話をしてもらおう, などです」(HS Podcast, 「No.439, August16, 2019, The Fantastic Library with Dragons at Uni High, with DoMonique」)。
- 19) Zine Cluster Meeting をきっかけに, 筆者は, 2019年7月18日, イリノイ大学の Art & Design Labs を見学し, スタッフの William Arnold から, 学生たちが制作した Zine のコレクションを見せてもらった。HS Blog, 「イリノイ大学の授業作り, 学び合いのプロセスを協働でデザイン, September 9, 2019」に写真を掲載している。また, 2019年8月に Urbana の郊外にある地ビールのレストランで開催されたコミック研究会 (Comics Colloquium) には, イリノイ大学のライブラリアンや地域在住のコミック愛好家が集まった。そこには, Zine Cluster Meeting の関係者も複数, 参加していた。
- 20) 機械科学・工学部において, 学生たちは専門的な知識と技能を習得するだけでなく, 研究をまとめ発表するうえでは, 英語での表現力のスキルアップが欠かせない。また, 学生各自の研究プロセスを記録・発信するオンライン上のプラットフォーム作りのためには, メディアやアート・デザインの専門家とも協議を重ねる。教育・学習法には, 教室という空間作りも重要な要素である。例えば, この研究会が行われた Armory182 教室は, 高さが異なる複数の種類の椅子やテーブルがあり, 利用者は, それぞれの好みの椅子に座り, 授業に参加する。利用者の「動線」までも意識して, 授業デザインに活かすという発想が筆者にとっては興味深かった (HS Blog, 「イリノイ大学の授業作り, 学び合いのプロセスを協働でデザイン, September9, 2019」)。
- 21) 「フィールドワーク研究」の授業構成や「ZINE 大会」までのプロセスについては, 西川 (2019: 66-68) に詳しく記している。
- 22) 米国では, St. Louis Public Library (HS Blog, 「St. Louis から Zine レポート(1), Oct. 22, 2018」), New York Public Library (HS Blog, 「NY から Zine Report(1), Dec.2, 2018」) を訪問した。英国では, Invia (Institute of International Library) の Stuart Hall Library (HS Blog, 「London から Zine レポート(1), Spet.11, 2015」), London College of Communication Library (HS Blog, 「London から Zine レポート(2), Sept.16, 2015」), Welcome Collection, Bishopsgate Library (HS Blog, 「London から Zine レポート(12), Jan. 21, 2019」) を訪問した。
- 23) Leila Kassir は, 2009年に, 前任校の London College of Communication (LCC) の Library に Zine Collection を開設した。Art Zine に限らずあらゆる種類の Zine を精力的に収集し, 2018年現在4000冊以上の Zine が収納されている (Collingwood and Kassir 2018: 82)。Kassir はまた, Zine に関心をもつライブラリアンの情報交換のネットワーク作りを進めてきた。筆者は, 2015年に Invia の Stuart Hall Library を訪問した際に, LCC の Zine Collection の閲覧を勧められ, Kassir を紹介された。LCC のライブラリーを訪問し Kassir と話し, 多数の Zine を手にとったことが, 筆者が英国の Zine Culture に触れるきっかけとなった。Kassir へのインタビューの内容は, HS Blog, 「London から Zine レポート(2) London Collage of Communication の Zine Collection, Sept.16, 2015」に掲載している。この時に, Kassir から Zine を扱うアート系の書

- 店として、Bookartbookshop を教えてもらった。2019年に Kassir と再会した時には、彼女からの紹介で、Welcome Collection (NPO) のライブラリーを訪問し、Health Zine というジャンルがあることを知った。また、Bishopsgate Library (NPO) では、Punk Fanzine のコレクションを手にとって見る事ができた。HS Blog, 「London から Zine レポート(12) Bishopsgate Library の Punk Fanzine に圧倒される, Jan. 21, 2019」参照。
- 24) 図書館での Zine Collection に関する研究は、米国が先行していると言われているが (Britton 2018: 72)、英国では、*Art Libraries Journal* (ALJ) Vol. 43, No. 2, 2018 において、“Zines and Libraries in the UK: Special Issue Reviews” と題した特集が組まれた。Zine Collection に関心をもつ大学や公共図書館のライブラリアンたちが、Zine の資料としての位置付けや分類、資料収集の方法、Zine をはじめとした自主出版の図書の違いなど、総合的に論じている。
- 25) 米国の Zine Librarian が参加する “Zine Union Catalog” の website からは、米国の複数のライブラリーの Zine Collection (ABC No Rio, the Barnard Zine Library, the Carnegie Library of Pittsburgh, Denver Zine Library, the Queer Zine Archive Project) を検索することができる。
- 26) 2015年6月14日、カルチュラル・タイフーンで座談会「En-Zine (Zine の輪): 反時代的対話醸成装置」が行われた。コーディネーターの小笠原博毅は、後日、Harukana Show に、「スコットランド、グラスゴーでの Football Fanzine との出会い」についての原稿を寄せた。そこで、Michell Library という市立図書館の Football Fanzine Collection を次のように紹介している。「ミッチェル図書館という素晴らしい市立図書館があって、そこではかなりマイナーなものまで多くのファンジンのバックナンバーが保管してある」。ここで小笠原は、Football Fanzine を3つに分類している。「一つは、ローカルな歴史を超マニアックなファンが一つ一つ掘り起こしていく『歴史探求型』。次にクラブの公式見解にいつも衝突いて、皮肉と嫌味とユーモアたっぷりの『オルタナティブ情報発信型』。最後に、これはグラスゴーのサッカー文化にとっても特徴的なことですが、政治色を前面に出してセクト主義的色彩を憚らない『政治扇動型』」。HS Podcast, 「No. 225, July 1, 2015, En-Zine トーク(4)スコットランド、グラスゴーでファンジンの世界に出会う with Ogasawara-san」参照。
- 27) Cox (2018), “Zines at the New York Public Library” Website を参照。
- 28) HS Blog, 「St. Louis から Zine レポート(1) クリエイティブに模索する公共図書館, Zine Collection & Recording Room, Oct. 22, 2018」参照。また、2016年11月18日の Harukana Show で、当時、Washington 大学 St. Louis 校の図書館に勤務していた小牧龍太は、米国の公共図書館のパブリックスペースとしての機能や利用者のニーズの変化について語っている (西川 2017: 62), HS Podcast, 「No. 296, Nov. 18, 2016『今こそ Zine, with Chris』」参照。
- 29) Christensen はこの日、Harukana Show で、彼女が関わる地域でのイベント情報も紹介してくれた。CLAW (Champaign Ladies Amateur Wrestling) というアマチュアの女子プロレスショーである。収益は地域の様々な活動へ寄付される。Christensen はレスラー名をもち、衣装を着てショーにも出演している。エンターテイメントをとおしてコミュニティとつながるといふ実践は、Christensen が企画する大学図書館のイベントのコンセプトとも共通している。
- 30) HS Podcast, 「No. 434, July 12, 2019, International Zine Month」参照。2019年国際 Zine 月間中、UCIMC Zine Library では、イリノイ大学の「都市問題」の授業で学生たちが制作した Zine (写真5)、アラスカ在住のアーティスト Vermicious Knid の Zine や Mini Zine などが展示された。期間中のライブラリー訪問者には無料で Zine を配布した。7月9日には、IMC Zine Library とアーカイブのツアーを開催、7月27日の Urbana’s Downton Get Down という屋外での地域イベントにおいて、誰でも、気楽に、その場で Zine 作りを楽しむことができるブースを出した。
- 31) 2019年度後期の「フィールドワーク研究」では、受講生の一人が、調査記録のレポートに次のように記していた。「Zine の制作に入るまでは、自分の関心を自由な形で書くことができることが、とても魅力的だと思っていた。ところが、いざ、制作をしようとする、一歩も前に進めなくなった。Zine 作りをとおして、自由の良さと怖さと、読者に見てもらうためにまとめる経験をすることができた」。
- 32) Liebenberg らのプロジェクトチームは、2019-2020年度の Strategic Instructional Innovations Program (the Grainger College of Engineering at the University of Illinois at Urbana-Champaign) からの研究助成を獲得した。Liebenberg からは、2019年12月末に、「2019年後半は多忙となり、残念ながら Zine Cluster Meeting には参加できずにいます。現在は、ePortfolio プログラムの共同開発に集中しています。2020年に向けての展開をまた知らせます」という内容のメールをもらった。領域横断的な共同研究が、機械科学・工学部内の複数の科目を関連させた授業デザインや ePortfolio のプラットフォーム作りなどにどのように活かされるのか、楽しみである。
- 33) David L. Hays, “Associate Head, Landscape Architecture Department”
- 34) 本論文では、イリノイ大学で行われている取り組みに焦点を当てたが、Zine Making を取り入れた教育に関しては、様々な専門分野の視点から多数の論文がある (Brouwer and Licona 2016, Creasap 2014, Desyllas & Sinclair 2014, Hoffmann & Stake 1998, Honma 2018, Yang 2010, など)。こうした先行研究においても、著者それぞれの社会的実践と学術的研究を組み合わせたアプローチが多い。
- 35) 本論文では触れることができなかったが、在外研究

期間中に筆者は、Zine-Making を取り入れた授業だけでなく、イリノイ大学東アジア言語文化学部やイリノイ大学附属高校の日本語クラスを見学した。2019年5月に、Uni High を訪問した際には高校生たちに、日本の何に興味があるのかを尋ねると、「アニメ」や「神社」や「北海道」など、いろいろな答えが返ってきた。Harukana Show では、2019年5月から7月にかけて、イリノイ大学、附属高校、コミュニティカレッジで日本語クラスを担当する教員や日本語を学ぶ学生をゲストに招き話を聞いた。第二次世界大戦以降の日米関係と日本語教育の変化や、日本語を学ぶ学生（米国への留学生を含む）の日本への関心の一端を知ることができた。日本語を学ぶ学生たちは、幼い頃からアニメやゲームをとおして生活のなかで日本のポップカルチャーに触れ、オンラインで自分好みの日本情報を常時入手し、日本在住の友人とつながりをもつ。日本を訪問した経験がある学生の割合も多い。HS Podcast, No. 424-1, No. 425, No. 426, No. 431, No. 432-2, No. 437, No. 443, 参照。

参考文献・資料

参考文献

Alvarez, Anna

- ・2019, “MINI PROJECT 10, Design for Recycling”, Design for Manufacturability (ME270), University of Illinois at Urbana Champaign

ばるばら・野中モモ編著

- ・2017『日本の ZINE について知ってることすべて：同人誌、ミニコミ、リトルプレス—自主制作出版史 1960～2010年代』, 誠文堂新光社

Bartel, Julie

- ・2004, *From A to Zine: Building a Winning Zine Collection in Your Library*, American Library Association

Britton, Siobhan,

- ・2018, “What we do, is (still) secret? Collection, care and accessibility of zines in UK collection”, *Art Libraries Journal*, 43/2, pp. 72-76

Brouwer, Daniel C.; Licon, Adela C.

- ・2016, “Trans (effective) meditation: feeling our way from paper to digitized zines and back again”, *Critical Studies in Media Communication*, Vol. 33, No. 1, pp. 70-83

Collingwood, Ruth; Kassir, Leila

- ・2018, “Gathering the margins: the London College of Communication Library Zine Collection”, *Art Libraries Journal*, 43/2, pp. 82-87

Cox, Debbie

- ・2018, “Developing and raising awareness of the zine collections at the British Library”, *Art Libraries Journal*, 43/2, pp. 77-81

Creasap, Kimberly,

- ・2014, “Zine-Making as Feminist Pedagogy” in *Feminist Teacher*, Vol. 24, No. 3 pp. 155-168

Desyllas, Moshoula Capous; Sinclair, Allison

- ・2014, “Zine-Making as a Pedagogical Tool for Transformative Learning in Social Work Education”, *Social Work Education*, Vol. 33, No. 3, pp. 296-316

Drayton, Tony ed.

- ・2018, *Ripped & Torn: The Loudest Punk Fanzine in the UK*, Ecstatic Peace Library

Dumcombe, Stephen

- ・2008 [1997], *Note from Underground: Zines and the Politics of Alternative Culture*, Microcosm Publishing

Garza, Thomas ed.

- ・2013, *Grassroots Media Zine*, No. 1, Harukana Show org.
- ・2014, *Grassroots Media Zine*, No. 2, Harukana Show org.
- ・2016, *Grassroots Media Zine*, No. 3, Harukana Show org.

Hoffmann, Frances L., and Stake, Jayne E.

- ・1998, “Feminist Pedagogy in Theory and Practice: An Empirical Investigation.” *NWSA Journal* 10, pp. 79-97

Honma, Todd

- ・2016, “From Archives to Action: Zines, Participatory Culture, and Community Engagement in Asian America”, *Radical Teacher: A Socialist, Feminist, and Anti-Racist Journal of the Theory and Practice of Teaching*, No. 105 (Summer 2016), pp. 33-43

Kassir, Leila

- ・2018, “Viewpoint: Collecting the pieces”, *Art Libraries Journal*, 43/2, pp. 69-70

松川恭子・辻野理花・西川麦子

- ・2018, 『『メディア実践系』授業の作り方（実践編）：他者から学び、伝える方法』『甲南大学紀要文学編』 No. 168, pp. 105-132

西川麦子

- ・2012, 「コミュニティラジオをグローバルに開く：アメリカ、イリノイ州、WRFU-LP の日本語番組の試み」『甲南大学紀要文学編』 No. 162, pp. 51-68
- ・2013a, 「多文化接触のメディア空間—米国のコミュニティラジオから」『世界思想』 40号, 2013年春, pp. 18-21
- ・2013b, 「運動としてのコミュニティ・メディア：アメリカ、イリノイ州、WRFU-LP とグローバルなネットワーク」『甲南大学紀要文学編』 No. 163, pp. 133-152
- ・2013c, “A Media Space for Cultural Exchange: Exploring Community Radio in the United State”, Garza, Thomas ed. *Grassroots Media Zine*, No. 1, Harukana Show org.
- ・2014a, 「地域の多様性をつなぐメディア実践：アメリカ、イリノイ州、アーバナ・シャンペーンメディア表現者たち」『甲南大学紀要文学編』 No. 164, pp. 113-132
- ・2014b, “The Ghost of George Clark: From An Interview With Stuart Hall”, Thomas Garza ed. *Grassroots Media Zine*, No. 2, pp. 3-44, Harukana Show org.,
- ・2014c, 「コミュニケーションツールとしてのラジオ」『建築雑誌』 Vol. 129, No. 1665, pp. 30-31
- ・2015, 「1960年代、ノッティングヒルの『新しい』コミュニティ活動に関する研究序説：スチュアート・ホールからの問い」『甲南大学紀要文学編』 No. 165, pp.

141-157

- ・2016a, 「1960年代, ノッティングヒルにおけるロンドン・フリースクールのメディア戦略: John ‘Hoppy’ Hopkins の『ハブニング』の作り方」『甲南大学紀要文学編』No.166, pp.87-104
- ・2016b, “John ‘Hoppy’ Hopkins: interviews from 2009-2014”, ‘Grassroots Media Zine’, No.3., pp.1-70, Harukana Show org.
- ・2016c, 「アクションリサーチ法」工藤保則, 寺岡伸悟, 宮垣元編『質的調査の方法—都市・文化・メディアの感じ方』第2版, 法律文化社, pp.144-155
- ・2017, 「現代のコミュニケーション・ツールとしてのZINE: 顔が見える他者を引き寄せるメディア」『甲南大学紀要文学編』No.167, pp.51-66
- ・2018, 「『メディア実践系』授業の作り方(総論): 甲南大学文学部社会学科の取り組み」『甲南大学紀要文学編』No.168, pp.95-104
- ・2019, 「『参加型メディア』Zine を取り入れたワールドワークの授業: 他者に伝え学び合う」『甲南大学紀要文学編』No.169, pp.63-77

野中モモ

- ・2019, 「声を出す練習—日本のZINEの(再)発見」『すばる』No.5, 2019, 集英社, pp.187-194

小笠原博毅

- ・2017, 『セルティック・ファンダム—グラスゴーにおけるサッカー文化と人種』せりか書房

Pagano, Alexander; Liebenberg, Leon; Goldstein, Molly H

- ・2019, “Play-in-learning: Studying the Impact of Emotion and Cognition in Undergraduate Engineering Learning”, Proceeding of the ASEE Annual Conference & Exposition 2019, pp.17343-17354

Piepmeier, Alison

- ・2009, ‘Girl Zines: Making Media, Doing Feminism’, New York University

ピープマイヤー, アリソン著, 野中モモ訳

- ・2011, 『ガール・ジン: 「フェミニズムする」少女たちの参加型メディア』太田出版

Shen, Sifan; Powell, Paige; Scholl, Ethan; Fepreira, Kate (Resaerch and Story), Powell, Paige (Illustration)

- ・2019, “BEFORE THE ENERGY CRISIS”, A Team Project in Thermodynamics (ME300), the University of Illinois at Urbana-Champaign

タテイシナオフミ

- ・2011, 『DIY TRIP—手作り印刷とDIY精神をめぐる旅—シアトル・ポートランド編』
- ・2013, 『FOOT BALL ACTIVIST』Vol.1
- ・2014, 『SOLO JOURNEY BY THREE』
- ・2015, 『Tシャツ印刷であそぶZINE』

The Subcultures Network

- ・2018, ‘Ripped, torn and cut: Pop, politics and punk fanzines from 1976’, Manchester University Press

Yang, Andre

- ・2010, “Engaging Participatory Literacy through Science Zines”, ‘The American Biology Teacher’, Vol.72, No.9, pp.

573-577

資料 (Online)

Hays, David L.

- ・2019, “LA 587: GRADUATE SEMINAR: NEGOTIATING LANDSCAPE THROUGH ZINES”, [HTTPS://LANDARCH.ILLINOIS.EDU/COURSES/LA-587-GRADUATE-SEMINAR-NEGOTIATING-LANDSCAPE-THROUGH-ZINES/](https://landarch.illinois.edu/courses/LA-587-GRADUATE-SEMINAR-NEGOTIATING-LANDSCAPE-THROUGH-ZINES/)
- ・2019, “David L. Hays, Associate Head, Landscape Architecture Department”
<https://landarch.illinois.edu/faculty/david-l-hays/>

Heckel, Jodi

- ・2019, “University’s Small Press Fest celebrates small press and DIY publications”, Reaserch News, Humanities, UIUC, April 5, 2019,
<https://news.illinois.edu/view/6367/771132>

Grassroots Media Zine : <http://grassrootsmediazine.org/>

- ・Grassroots media Zine#1: A Media Space for Cultural Exchange
- ・Grassroots media Zine#2: An Interview with the late Prof. Stuart Hall
- ・Joh ‘Hoppy’ Hopkins: interviews from 2009-2014

以上, Grassroots Media Zine website 制作: Thomas Garza, (最終更新2016年8月8日)

Harukana Show Blog : <http://harukanashow.org/archives/category/mugi-chan-blog>

西川麦子

- ・「表現しながら人とつながるツール @Zine Library, April 14, 2015」
- ・「London から Zine レポート(1) Stuart Hall Library, Invia & Housmans Bookshop, Sept. 11, 2015」
- ・「London から Zine レポート(2) London College of Communication の Zine Collection, Sept. 16, 2015」
- ・「London から Zine レポート(3) ROUGH TRADE & Fanzine, “Vague”, Sept. 17, 2015」
- ・「London から Zine レポート(4) Bookartbookshop, Sept. 18, 2015」
- ・「Illinois から Zine レポート(1) Quimby’s Bookstore: Zine が生き生きと並ぶ, Chicago, Aug. 7, 2016」
- ・「Illinois から Zine レポート(2) CHIPRC, Zine Culture をはぐくむ草の根の活動, Chicago, Aug. 7, 2016」
- ・「Illinois から Zine レポート(3) Champaign-Urbana でゆるやかなジンつながり, Aug. 21 & 23, 2016」
- ・「London から Zine レポート(5) Housmans Bookshop & Bookartbookshop, Spt. 9, 2016」
- ・「London から Zine レポート(6) Artist Self-Publishers’ Fair, Sept. 2016」
- ・「London から Zine レポート(7) GMZ#3 がつなぐ縁, Sept. 11-19, 2016」
- ・「London から Zine レポート(8) London Print Studio & London Centre of Book Arts, Sept., 2016」

- ・「Chris さんのインタビュー (April 22, 2011) Zine: メインストリームに抗するメディア, Nov. 20, 2016」
- ・「Illinois から Zine レポート(4) UCIMC の Zine Library が身近に, August 2017」
- ・「London から Zine レポート(9) Bookartbookshop に触発され, 次の夢は… Sept. 8 & 14, 2017」
- ・「London から Zine レポート(10) Housmans Bookshop へ GMZ を買いにゆく, Sept. 13, 2017」
- ・「St. Louis から Zine レポート(1) クリエイティブに模索する公共図書館, Zine Collection & Recording Room, Oct. 22, 2018」
- ・「St. Louis から Zine レポート(2) 運動としての書店, LEFT BANK BOOKS, William Burroughs の縁, Oct. 22, 2018」
- ・「U-C の The Idea Store と『工芸品』としての Zine, Nov. 24, 2018」
- ・「NY から Zine Report (1)『いいなあ』と『びみょう』な感じ @The Center for Book Arts, NY Public Library, Dec. 3, 2018」
- ・「NY から Zine Report (2) NY と London の草の根のつながり @The Velvet Underground Experience, Printed Matter, Inc., Dec. 4, 2018」
- ・「Zine in the Classroom (1)『Zine を使った授業の作り方』, Sept. & Oct., 2018」
- ・「Zine in the Classroom (2) 図書館学の Zine Workshop, Nov. 28, 2018」
- ・「Zine in the Classroom (3) 都市問題の授業で Zine Fest, 主張する Zines, Dec. 11, 2018」
- ・「London から Zine レポート(11) Bookartbookshop で SKU Fieldwork Project の Zine 作品展示! Jan. 17 & 24, 2019」
- ・「London から Zine レポート(12) Bishopsgate Library の Punk Fanzine に圧倒される, Jan. 21, 2019」
- ・「Small Press Fest @UCIMC を 3 倍楽しむ, April 13, 2019」
- ・「プレゼンテーションもコミュニケーション, June 6, 2019」
- ・「イリノイ大学の授業作り, 学び合いのプロセスを協働でデザイン, September 9, 2019」

Harukana Show Old Site : http://harukanashow.org/archive/HARUKANA_SHOW/English.html

Podcast

- ・「No. 4-1, April 22, 2011, アメリカの Zines とは?」
- ・「No. 5-2, April 29, 2011, タテイシさんの Zine Culture との出会い」
- ・「No. 7-2, May 13, 2011, タテイシさんの Zine Culture との出会い(2), Share the Reuse」
- ・「No. 10-3, “Creative Reuse” with タテイシ & Tom」
- ・「No. 14-2, July 1, 2011, コミュニケーション・ツールとしての Zine」
- ・「No. 18-2, July 29, 2011, なでしこ Japan & タテイシさんの夏の課題」
- ・「No. 22-2, August 26, 2011, タテイシさんの夏の作品, DIY TRIP SEATTLE & PORTLAND」
- ・「No. 35-2, Nov. 25, 2011, Tateishi & Tsujino 初顔合わせトーク～メディアをクリエイティブに DIY する」
- ・「No. 36-2 & 3, Dec. 2, 2011, コミュニティメディア年末総集編トーク (前・後)」
- ・「No. 38-1, Dec. 16, 2011, 日本の Zines は, お部屋に馴染む? クリスマス前の浅漬け話」
- ・「No. 56-1, April 20, 冷え冷え U-C からイベント情報, 古本市, ジンフェス, イリノイマラソン」

Blog

- ・「Mini Maker Faire: DIY 精神なイベント, 明日, IMC で!, April, 15, 2011」
- ・「UC-Mini Maker Faire: どうして? April 17, 2011」
- ・「Zines: “zeens” と発音, するらしい, April 22, 2011」
- ・「ゆつたり Zine な土曜日～Midwest Zine Fest @ IMC, May 1, 2011」
- ・「Zine なはからい, July 2, 2011」
- ・「Zine な関係: 小さな世界から始まる愉快的な広がり, July 2, 2011」
- ・「“become the media”: 誰でもメディアになれる? Aug. 17, 2011」
- ・「まだよくわからないけれど, オルタナティブについて, Sept. 17, 2011」
- ・「DIY TRIP: Tateishi さんの初 Zine が届きました! Sept. 13, 2011」

Albums

- ・「UC—MINI MAKER FAIRE, April 16, 2011」
- ・「Midwest Zine Fest, April 30, 2011」

Harukana Show Podcast : <http://harukanashow.org/archives/category/harukana-show-podcast>

- ・「No. 66, June 29, 2012, Tateishi さんの EURO な 6 月～サッカー&市民メディア」
- ・「No. 69, July 20, 2012, Tateishi-san 最新フリペ!『拡散』と情報のセレクトショップ化」
- ・「No. 83, Oct. 26, 2012, お洒落な Zine プーム, ふしぎなミシマ社 with Tateishi」
- ・「No. 113, May 24, 2013, Football Activist Zine #01 できました! with Tateishi」
- ・「No. 135, Oct. 25, 2013, 『ディストロ』って? 流通も DIY with Tateishi」
- ・「No. 136, Nov. 1, 2013, 今日から11月& Grassroots Media Zine」
- ・「No. 149, Jan. 31, 2014, 『ZINE』で Zine しようぜ! with Tateishi」
- ・「No. 151, Feb. 14, 2014, 『当たり前のことだから』
- ・「No. 166, May 30, 2014, Learning Commons で『会読』, 知的好奇心をキックする with Okabe-san」
- ・「No. 169, June 20, 2014, Tateishi 風パンクロックな『イベント論』」
- ・「No. 190, Nov. 14, 2014, ロックにジン, アートの秋を Tateishi-san と」
- ・「No. 194, Dec. 12, 2014, 『少しでも古いモノ』がお洒落, Tateishi さんにとってもお洒落な写真 Zine」

- ・「No. 195, Dec. 19, 2014, 『この本を読んで人生を踏み外した』 with Tateishi」
- ・「No. 209, March 27, 2015, レコードショップに Zine があった頃 with Tom-san」
- ・「No. 210, April 3, 2015, レトロな駅舎のレコードショップ “Exile on Main St.”」
- ・「No. 212, April 17, 2015, 大手書店に Zine が並ぶ? with Tateishi-san」
- ・「No. 213, April 24, 2015, 『そこから始める, つながる ZINE』 with Tateishi-san」
- ・「No. 224, June 26, 2015, En-Zine トーク(1) Tateishi さんの ZINE な生き方」
- ・「No. 223, July 3, 2015, En-Zine トーク(2) 途中を形にして共有する with Mugiko」
- ・「No. 224, July 10, 2015, En-Zine トーク(3) もう1つの生き方, やり方 with Sabu-san」
- ・「No. 225, July 17, 2015, En-Zine トーク(4) スコットランド, グラスゴーでファンジンの世界に会う with Ogasawara-san」
- ・「No. 235, Sept. 25, 2015, 秋の Zine Talk (1) London の Zine Collection with Mugiko」
- ・「No. 236, Oct. 2, 秋の Zine Talk (2) つながりをつくる En-Zine 力」
- ・「No. 237, Oct. 9, 2015, 読書の秋, ライブラリアンのための Zine コレ本 with Ryuta & Mugi」
- ・「No. 270, May 20, 2016, GMZ#3 物語(1) 『印刷コンシェルジュ』に会いに東京へ, イニテック訪問」
- ・「No. 271, May 27, 2016, 『アメリカーナ』, GMZ#3 物語(2) Zine の歩き方」
- ・「No. 287, Sept. 16, 2016, Zine Collection をライブラリーする with Kathryn」
- ・「No. 288, Sept. 23, Print, Publication Studio @ London」
- ・「No. 289, Sept. 30, 2016, HIPSTER って? いけてない HIP もいいかも」
- ・「No. 296, Nov. 18, 2016, HS リバイバル (No. 4), 今こそ Zine, with Chris」
- ・「No. 337, Sept. 1, 2017, 夏の UC レポート, 『Zines は時代とともに』 with Em-san」
- ・「No. 362, Feb. 23, 2018, 7年前の Mugiko の夢, U-C のコミュニティラジオ局から日本語放送」
- ・「No. 368, April 6, 2018, HARUKANA SHOW 8年め! & ZINE MAKING AS SOCIAL ACTION」
- ・「No. 372, May 4, 2018, ガーデニングの季節, 支え響きあう『ZINE』 Culture」
- ・「No. 396, Oct. 19, 2019, 日本の装飾用マステは, アメリカでは “Washi Tape”?」
- ・「No. 409, Jan. 18, 2019, Manga & Martial Artist Kofi さん (前半) 始まりは DRAGON BALL」
- ・「No. 410, Jan. 25, 2019, Manga & Martial Artist Kofi さん (後半) 日本の Manga とアメリカのコミックの違い」
- ・「No. 416, March 8, 2019, “Punk Fanzine” に触れて, Punk を聴いてみる」
- ・「No. 421, April 12, 2019, Small Press Fest! イベント情

- 報」
- ・「No. 424-1, May 3, 2019, 『Kobe Beef と Takarazuka』 with Yessica-san」
- ・「No. 425, May 10, 2019, U-C の季節と日本語教育トーク with Mari-san」
- ・「No. 426, May 17, 2019, Costa Rica から Maria-san 初出演, Uni High の生徒さんからのリクエスト曲」
- ・「No. 431, June 21, 2019, Erika さん, 7年ぶり出演, 現在はコミュニティカレッジで教師」
- ・「No. 432-2, June 28, 米国で日本のポップカルチャーの浸透と日本語学習 with Misumi さん」
- ・「No. 434, July 12, 2019, International Zine Month! with Kathryn」
- ・「No. 437, August 2, 2019, コミュニケーションツールとしての言語 with Aria & Momoka」
- ・「No. 439, August 16, 2019, The Fantastic Library with Dragons at Uni High, with DoMonique」
- ・「No. 440, August 23 2019, Outreach activities of University Library (イリノイ大学図書館のアウトリーチ活動) with Sarah」
- ・「No. 443, Sept. 6, 2019, 絵本と日本語をとおした交流『野うさぎ文庫』 with Chie-san & Zoe-san」

Harukana Show Zine & Paper :

- <http://harukanashow.org/archives/category/zinereport>
- ・「Grassroots Media Zine#1 (in English): A Media Space for Cultural Exchange」
- ・「Grassroots Media Zine 創刊号!」
- ・「Grassroots Media Zine#2 (in English): an Interview with the late Prof. Stuart Hall」

以上, Harukana Show website 制作: 西川麦子 (最終更新2020年2月15日現在)

URL

- ・Barnard Zine Library: <https://zines.barnard.edu>
- ・Bishopsgate Institute: <https://www.bishopsgate.org.uk>
- ・bookartbookshop: <http://www.bookartbookshop.com>
- ・Center for East Asian & Pacific Studies (CEAPS): <http://www.eaps.illinois.edu>
- ・Center for Innovation in Teaching & Learning (CITL): <https://citl.illinois.edu/>
- ・Champaign Public Library: <https://champaign.org/>
- ・Champaign Urbana Immigration Forum: <http://immigration-forum.blogspot.jp>
- ・Chicago Publishers Resource Center (CHIPRC): <http://chiprc.org>
- ・Current Research Cluster (the 2019-20 academic year), IPRH: <https://www.iprh.illinois.edu/fellowships/researchclusters/current.html>
- ・Grassroots Media Zine: <http://grassrootsmediazine.org/>
- ・Harukana Show: <http://harukanashow.org/>
- ・Kathryn La Barre: <https://www.kathrynlabarre.net/home>

- ・ LCC Collections and Archives: <http://www.arts.ac.uk/study-at-ual/library-services/collections-and-archives/london-college-of-communication/>
- ・ Maximumrocknroll: <http://maximumrocknroll.com/>
- ・ Media Rocco: https://mediarocco.jp/?page_id=20
- ・ Mitchell Library: <https://www.glasgowlife.org.uk/libraries/venues/the-mitchell-library>
- ・ Mimi Thi Nguyen: <https://www.mimithinguyen.com/>
- ・ Paralym Art: <http://paralymart.or.jp/association/>
- ・ Small Press Fest FB: <https://www.facebook.com/smallpressfest/>
- ・ Stuart Hall Library: <http://www.iniva.org/library>
- ・ 3 Dot Zine: <http://www.3dotzine.com/home/>
- ・ Strategic Instructional Innovations Program (The Grainger College of Engineering at the University of Illinois at Urbana-Champaign : https://ae3.engineering.illinois.edu/files/2019/07/Grainger-Engineering-SIIP-Projects-2019-20-REVISED-9_3-1.pdf
- ・ TEACHING IN IFLEX INTERACTIVE CLASSROOMS: <https://citl.illinois.edu/citl-101/instructional-spaces-technologies/collaborative-classrooms>
- ・ The Department of Landscape and Architecture, UIUC: <https://landarch.illinois.edu/the-department/>
- ・ United States Census Bureau: <https://www.census.gov>
- ・ University Library, University of Illinois at Urbana Champaign: <https://www.library.illinois.edu>
- ・ University of Illinois at Urbana Champaign: <https://illinois.edu/>
- ・ University of Illinois Laboratory High School: <https://www.uni.illinois.edu>
- ・ Urbana Champaign Independent Media Center: <http://www.ucimc.org>
- ・ Urbana Free Library: <https://urbanafreelibrary.org/>
- ・ WORK Press & Publication: <http://www.workpandp.com/#>
- ・ WRFU-LP104.5FM: <http://www.wrfu.net>
- ・ Zine Libraries, Barnard College: <https://zines.barnard.edu/zine-libraries>
- ・ Zine libraries interest group: <http://zinelibraries.info/about/>
- ・ Zines at The New York Public Library: <https://www.nypl.org/about/divisions/general-research-division/periodicals-room/zines>
- ・ Zine Union Catalog: <https://zinecat.org/index.php>

*最終アクセス2020年1月5日